

大安寺

日本最古の仏教寺院のひとつである大安寺は、熊凝精舎にその起源がある。研究者は、熊凝道場は日本の建国の歴史における重要な政治家であった聖徳太子（574～622年）が創建したと考えている。639年、舒明天皇（593～641年）が、聖徳太子の死後、その遺志を継いで、百済大寺（百済の大きな寺）を建設した。これは日本の皇族が創建した初めての仏教寺院であり、当時は大官大寺（大きな天皇の寺）という名前で呼ばれていた。710年に都が平城京（現在の奈良市）に移されてから6年後、この寺は大安寺と名前を改めた。南都七大寺のひとつとして、皇居を守り、「日本」という呼称を用い始めたばかりの新しい国を守ることをその役割としていた。

奈良時代（710～794年）、大安寺は約24万平米の敷地を有していたが、これは現在の約25倍の面積である。そして、5世紀につくられた鍵穴の形（前方後円墳）の杉山古墳の大部分を占めていた。大安寺には道場が開かれ、約900人の日本の僧侶が仏教の経典を学んでいた。また、中国やインドなど外国から訪れた僧もここで学んだ。伽藍の南部に大きな塔が2つ建てられ、考古学調査によると、それらはどちらも七重塔であったと考えられている。何世紀にもわたって、大安寺は火災や地震に見舞われてきた。そして、16世紀までに廃寺同然となっていた。しかし、その後再興され、今日では8世紀につくられた9体の貴重な仏像が収められており、そのすべてが重要文化財に指定されている。また、大安寺は癩封じの祈祷でも知られており、年に2回開催される祈祷の祭りには1万人以上の来訪者がある。また、いくつかの仏教の巡礼の札所としても知られている。